関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# 20世紀の語史に映じたドイツ外来語観の変遷

| | |
|---|---|
| その他のタイトル | Wandel der Anschauungen uber das Fremdwortproblem im Spiegel der deutschen Sprachgeschichte im 20. Jahrhundert |
| 著者 | 福本 喜之助 |
| 雑誌名 | 独逸文学 |
| 巻 | 19 |
| ページ | 1-52 |
| 発行年 | 1974-04-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00017830 |

# 20世紀の語史に映じた ドイツ外来語観の変遷

福本喜之助

## はしがき

ドイツ語史や語学史を学んでから，特に，外来語の問題に多大の関心をもっている筆者は，これまでに，古代，中世，人文主義時代の外来語の変遷をみて，外国語や外来語の全盛期とも言うべき，17世紀の問題を取扱い，同時に，ドイツ国語協会による国語浄化運動とその語史的意義を論述してきたが，今回は主として，Leo Weisgerber や Peter von Polenz の論文，Lutz Mackensen の近著を中心にして，前世紀末から，Nazi の全盛期を経て，現代に至るドイツ外来語観の変遷を略述するとともに，これら3者にみられる見解を，特に，現代ドイツの外来語観を代表するものとして，ここに公表することにした．もっとも，かなり以前から，語の転用を有意義とする Elise Richter (Fremdwortkunde. Aus Natur und Geisteswelt 570 1919) をはじめ，従来の外来語や転来語を区別しないで，外国からの転用語をすべて転来語とみて，この転来語に映じたドイツ文化の発達を論じた Friedrich Seiler (Die Entwicklung der deutschen Kultur im Spiegel seines Lehnwortes 1924) や外来語とドイツ精神は無関係であることを力説し，外来語を弁護し，讃美して，更に Purismus を排撃した Heinrich J. Rechtsmann (das Fremdwort und der

deutsche Geist. Zur Kritik des völkischen Purismus 1953) 等の著書は有名であるが，特に，最近のドイツでは，一般に外来語の問題に対して，極めて無関心であるか，或は，更にその意義や価値を認めようとする傾向があることは事実である．本編では，主として Leo Weisgerber (Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege (In: Muttersprache. 70. Jhg. Heft 1, 1960) や，Lutz Mackensen の近著 Traktat über Fremdwörter (1972) 等にみられる外来語観を紹介する前に，先ず Peter von Polenz の二論文即ち，1966年10月の München 独文学会の講演，Sprachpurismus und Nationalsozialismus. Die Fremdwortfrage gestern und heute. (In: Germanistik-eine deutsche Wissenschaft 1967 ; 1967年1月 Kiel の Gesellschaft für deutsche Sprache での講演 Fremdwort und Lehnwort, sprachwissenschaftlich betrachtet. (In: Muttersprache. 77. Jhg. Heft 3/4 1967) や1926年から44年までのドイツ国語協会の機関誌 „Muttersprache“ に従って，今世紀にみられるドイツ外来語観の変遷の跡を辿ってみることにした．

最後に，本稿の公表に際して，いろいろ御高配を頂いた編集委員の方々に深謝の意を表したい．

昭和48年10月21日　　湖都　稲　葉　山

語源論 (Deutsche Etymologie 1962) や語源辞典 (Reclams Etymologisches Wörterbuch 1966), 「現代のドイツ語」 (Deutsche Sprache in unserer Zeit. Neuausgabe 1971) 又 Verführung durch Sprache. Manipulation als Versuchung 1973 等でも有名な Lutz Mackensen は外来語に関するその近著 Traktat über Fremdwörter (1972) で, 前世紀末から, 現代に至るまで, 急激に外来語を使用するものの数が増加した事実について次のように述べている.

„Schulen, Enzyklopädien und Zeitungen auf der einen, die Anstöße von Technik und Politik auf der anderen Seite haben in den letzten anderthalb Jahrhunderten mit ihren sehr verschiedenen Wirkweisen die Fremdwörter im deutschen Wortschatz vervielfacht nicht nur, sie haben auch die Zahl der Fremdwortbenutzer sprunghaft ansteigern lassen." (S. 89)

次に, Peter von Polenz (Fremdwort und Lehnwort, sprachwissenschaftlich betrachtet. 1967) が, この問題について, 純共時的な見地から, 自らの態度を明らかにした最初の言語学者と称揚した Leo Weisgerber (Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege. 1960) は, その論文の冒頭で, 次のように現代人が外来語の問題に無関心である事実に触れている.

„Die Sprachpflege hat es immer und überall auch mit dem Fremdwort zu tun. Dabei mögen Umfang und Gesichtspunkte der Arbeit wechseln, und man wird daraus mit Recht Schlüsse ziehen auf die Bedingungen, Triebkräfte und Ziele des Mühens um die Sprache. Die heutige Zeit scheint dem Fremdwort verhältnismäßig gleichgültig gegenüberstehen; und manche eifrigen Vorkämpfer glauben, daß die Gesellschaft für deutsche Sprache nicht genug auf diese Seite ihrer Aufgabe achte." (S. 1.)

ここで，現代ドイツの外来語問題を論じる前に，なぜ1937年以来，ドイツでは外来語について，次第に控え目な態度をとるに至ったのか，その原因を追及する意味でも，ナチの全盛時代を中心にしてみたドイツの外来語観からはじめることにしよう．

さて，外来語の影響についての問題は，これまで，言語の研究，その育成，それに関する批判等の方面で，極めて重要な役割を演じ，Jean Paul に由来する用語，外来語（Fremdwort 1817）や Ebel による転来語（Lehnwort. Ebel, Über die Lehnwörter der deutschen Sprache 1856）についての論議が未だつきないことは言うまでもないが，近代のドイツで外来語排撃の闘争がその頂点に達したのは，ナチ政権の最初の時代であった．これは何百年もつづいた運動の最後の段階であって，ドイツ語史では（特に，Adolf Bach, Geschichte der deutschen Sprache. 7. Auflage. 1961, S. 267—275, 340—342; 又は Hans Sperber-Peter von Polenz, Geschichte der deutschen Sprache, 5. Auflage, 1966, S. 82 ff. を参照されたい.）Sprachreinigung 又は Purismus の見出語で知られている．

この国語浄化論はどの時代でも，ドイツでは，常に政治的見地から，国民感情を高揚させることと関連して，極度に進展した．このことは30年戦争の時代，ナポレオン政治の没落，1871年のドイツ帝国建設以後，更に，第一次世界大戦突発の当時についても言うことができる．仏，英と事情の異ったドイツでは，言語社会学的見地からみたドイツ語の発達が，中世から18世紀に至るまで，文化的に優位にあったラテン語やフランス語の支配を受けていただけに，外国からの影響に対する闘争は特に烈しくつづけられたのである．

19世紀のドイツでは，民族感情という動機による国語浄化運動に，他の感情，即ち，従来，知識階級の特権と考えられてきた外国語や外来語を，多く使用した所謂学者文体に対する小市民的で，一般大衆的な不快の感情

が加わることになった．従って，1885年に創設された Der Allgemeine Deutsche Sprachverein はこの二重の意味で，先ず，外来語の独訳という仕事からはじめたのである．この協会は，世紀の転換期に，各方面の外来語の独訳に輝かしい成果を収めた．その際，„Gedenke, auch wenn Du die deutsche Sprache sprichst, daß Du ein Deutscher bist.“ という合言葉によったことは有名である．（これについては，O. Steuernagel, Die Einwirkung des Deutschen Sprachvereins auf die deutsche Sprache. Wissenschaftliche Beihefte zur Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins, 6. Reihe. H. 41, 1926; L. Mackensen, Die deutsche Sprache in unserer Zeit 1. Auflage 1956, S. 10 ff. 参照）

当時このように，実用的な独訳の仕事をつづけている背後で，所謂「浄化論者」と「反浄化論者」との文化政策上の論戦がいよいよ烈しくなってきた．先ずこの外来語排斥運動は，Fontane, Freytag, Heuse 等の作家や Treitschke, Schmidt, Delbrück 等の学者達から強硬な抵抗を受けた．協会やその活動について，ドイツ語学や文学を大学で講じていた人々の見解は全く二つに別れたようである．当時のドイツ語学を代表した Otto Behaghel や Friedrich Kluge 等は，協会を全面的に支持し，文学史家の Erich Schmidt や Gustav Roethe 等は，これに極力反対を唱えた．これはそのこと自体のためではなく，原則として，学術的な専門用語は独訳できないと言う学者の信念か，又はその階級の誇りからでたものと言われている．このように，学者社会一般にみられる外国崇拝の傾向や，特に，その典型的な人物とみられた Gustav Roethe に対して，第一次大戦以前とその間に，堂々と論陣を張ったのは，文学や言語の評論家として有名な Eduard Engel であった．この Engel の国語浄化論は，その著書にみられるように，好戦的で，しかも極端な狂信的愛国主義とでもいうべきもので，その烈しい論調はナチ時代の浄化論者に勝るとも決して

劣るものではなかった．盲目的な外国崇拝，度を外した外国語，外来語の濫用に憤激した Engel は口を極めて，この傾向を罵倒し，外来語の使用を „geistiger Landesverrat“ と呼び，„Nur ein deutschsprechendes deutsches Volk kann Herrenvolk werden und bleiben.“ と主張するに至った．（これについての評細は，E. Engel, Deutsche Sprachschöpfer. Ein Buch deutschen Trostes. Einleitung. 1919; Ders., Sprich Deutsch ! Ein Buch zur Entwelschung. 2. Auflage 1917, S. 6; Ders., Entwelschung. Verdeutschungsbuch für Amt, Schule, Haus und Leben. 1918, S. 22 を参照）

このように，Wilhelm 帝時代にみられる狂信的な国語浄化運動も，第一次大戦後に，多少その勢力が衰えることになった．Leo Spitzer (Fremdwörterhaß und Fremdvölkerhaß 1918) や Elise Richter (Fremdwortkunde. 1919) にみられるように，外来語を弁護する人々は，語の転用は有益であり，国際的な文化の交流や民族間の相互理解のためには必要なものと主張することになった．1925年に Theodor Steche の著書 Neue Wege zum reinen Deutsch が出たが，これは，言語の社会学的，組織的，文体論的な原則によって，外来語の歴史や当時の状態について書かれた貴重な文献であるといわれている．筆者は残念ながら，この名著に接する機会を逸したのが，一般によく知られていないので，ここに紹介しておきたい．

併しながら，20年代になって，協会の機関誌 „Muttersprache“ では，国語浄化熱が再び徐々に上昇し，1933年以後になって，やっとその頂点に達することになった．（これについての詳細は，1886年の以後の Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins. Muttersprache. Zeitschrift des Deutschen Sprachvereins (ab 1925). Muttersprache. Zeitschrift für deutsches Sprachleben mit Berichten aus der Arbeit des Deutschen Sprachvereins und des Deutschen Sprachpflegeamts

(ab 1939) を参照)

1933年1月30日の政権掌握に対する最初の反動として，協会の理事長であった Richard Jahnke が，同誌4月号や新聞に „Deutschland, erwache!“という有名なナチのスローガンで公表した国語浄化への檄は，その調子からみて，第一次大戦当時の Eduard Engel の極端な国粋主義的表現と比較すれば，まだまだ度を越えないものであった．この Jahnkeその他の人々は，更に外来語を愛用するナチ幹部の演説文体，特に，Hitler自体の文体を批判する勇気を振い起し，熱烈な祖国愛の精神から，総統や党に対して，Propaganda, Organisation, Garant, arisieren, Konzentrationslager, Sterilisation 等多数の外来語の使用をさけるように要請するに至った．それは，このような批判によって，総統の思想が，一般大衆に益々明らかに認められると期待したからである．この全体国家で，一定の外来語が故意に使用されるのは，総統の思想がすべての人々に分らないようにするのが，真の目的であったが，このことは純国粋主義的な当時の国語浄化論者には，想像もつかなかったようである．言うまでもなく，このような言語批判の動機は，単に国語愛の精神であった．従って，あくまでも善意の人々には，独裁者の動機，即ち，暴圧的な，道義的には非難すべき処置を，いかにも科学めいた外来語で婉曲に偽装しようとする意図を見破ることができなかったわけである．だから，これらの浄化主義者は外来語を批判して，ナチの正体を暴露するどころか，逆にこれによって，ナチの運動を促進できるという錯覚におち入っていた．（なお，この間の詳細な事情については，特に1933年から34年までの „Muttersprache“ を参照されたい.）

このように，政治的に素朴な人々の言語批判も，1934年から，35年にかけて，次第に声をひそめることになった．それは，大学で言語や文学を講じ，傍らこの協会の理事であり，又学術上の顧問でもあった人々が，極めて詭弁的な声明を試みたからであった．先ず，1933年以後，急激に上昇し

た国語浄化運動の波に対応したのは，Berlin 大学ドイツ文学教授 Arthur Hübner で，彼は1934年の春に，一切の素朴な言語批判を斥け，総統の外来語使用を弁護しようとした．即ち，敵自身の武器で，敵を打つ，換言すれば，敵と同じ言葉，つまり „die entdeutschte und verausländerte Sprache des marxistischen und demokratischen Parlamentarismus“ で，相手と話し合うという“天才的な考え”が Hitler にあったとまで主張するに至った（Muttersprache 49, 1934, Sp. 110 参照）．同じく協会の理事で，Gießen 大学ドイツ語学の教授であり，Trübner のドイツ辞典で有名な Alfred Götze も，純国粋的運動であるナチの外来語使用は „よく考慮された政治的意図から” でたものであるから，これを一般の浄化運動から除外すべきであると，大体 Hübner と同じような見解を表明したが，ここに甚しい矛盾が認められる．(Muttersprache 50, 1935, Sp. 80 参照)．更に第三の理事として，Erlangen 大学教授 Ewald Geißler は，あまつさえ，1938年号の „Muttersprache“ 誌上で，(Sp. 298)，Hitler の言葉を口を極めて賛美するに至ったようである．

このようにして，ナチの主脳部や党自体を除外してから，協会の浄化運動は一般の生活に絶大の勢力を得ることになった．殊に，協会の理事長 Richard Jahnke の死後，新たに理事長に選ばれた Rudolf Buttmann は内務省文化部長から，後に Bayern 国立図書館長になった人で，彼は1933年 9 月号で，全協会員によびかけ，自らの所信や重大な決意を表明した．そこで自ら „S.A. unserer Muttersprache“ と称した協会の人々は，全ドイツの官庁や新聞に，覚え書や勧告状を発送し，公文書をはじめ，ラジオ等の講演にも，外来語をさけ，ドイツ製の商品，商店，旅館名，献立表，劇場の座席表示等，更に，運動競技の団体にも，ドイツ語を用いることをすすめたのである．まだその上に協会は，すべてこれらの一切に規定を設けることを要求し，これに対して，無料で相談に応じることにした．当時，各方面の反響は迅速で，又専ら肯定的なものであったと言われてい

る．ナチ主脳部の中でも，Göring, Frick, Darré 等は自ら進んでこの運動に協力したが，Hitler をはじめ，Goebbels, Himmler 等はこれを知らなかったのか，さし当り，この問題についてはなにも言わなかったようである．いずれにしても，国語浄化論者の純国粋的な祖国愛の精神から，神秘化する狂信的心酔やナチ的な好戦的活動への移行は，33年から34年頃までの協会員の言辞にみられるようである．

この運動は，協会員ばかりではなく，大学の講壇からも同時に，1933年以後，„Muttersprache“ 誌上（48. 1933, 49. 1934, 50. 1935）でつづけられた．当時の大学教授に烈しい調子でよびかけたのは，上述の Gießen 大学の Alfred Götze と同じ大学で社会学や社会心理学を講じていた Hans L. Stoltenberg であった．Stoltenberg は既に10年間も，学術用語の広汎な仕事にとりかかっていて，これを1931年に，協会の懸賞課題として完結し，1933年と34年に，2巻にまとめて，公表したところであった．(Deutsche Weisheitssprache 1933; Der eigentliche Wortschatz der Weisheitslehre 1934 を参照)．彼はドイツの科学語史を研究して，それによって，純ドイツ的な学術用語を創造するために，ドイツの古い造語綴や新しい造語手段を活用することをすすめた．(Z. B. Vernunfttum für Rationalismus, Geistgruppwissenschaft für Kultursoziologie, Seelkunde für Psychologie, fühligen für emotionalisieren, verstandhaft,—lich, —sam für intellektuell usw. を参照）その他，各大学に，言語についての顧問制を設けることの外に，大学生活の伝統的な名称を独訳する提案まで出されたと伝えられている．(Muttersprache 49. 1934. Z. B. Hochschulführer für Rektor, Lehrschaftsführer für Dekan, Amtshochlehrer für Ordinarius, Freihochlehrer für Privatdozent, Hochschüler für Student, hochschulhaft für akademisch usw. を参照)．

これよりも成功したのは，ドイツ文法の領域，特に，ドイツ語教育の教

本にみられる専門用語の独訳であった．20年以来 Klaudius Bojunga が準備した文法用語のリストは，1938年に，政府指令の付録として公表されることになった．それ以後は，ドイツ語教科書の新版には，独訳された新しい用語が採用されたようである．(Z. B. Hauptwort für Substantiv, Umstandsbestimmung für Adverb, Leideform für Passiv, Wesfall für Genitiv, Beugung für Flexion, Doppellaut für Diphthong usw.) 1938年に，この新しい独訳の用語を早速，Germanist の Erich Gierach が Paul, Die mittelhochdeutsche Grammatik の13版に採用したが，これも1950年になって，その15版で，L. E. Schmitt がとり除いたようである．この Gierach の思い切った処置は，純言語学的な考慮から出たものというよりも，むしろ，明らかに政治的な意図や純国粋主義的なイデオロギーによるものと言われているが，併しながら，一時は一般に無視されていた文法研究が，1950年来から，漸次勢力を得て，現代では，言語研究の中心になっている事実を考えれば，次の序文にみられる彼の卓見を看過することはできないだろう．

„Das letzte Jahrzehnt ist grammatischen Untersuchungen nicht günstig gewesen und das große Geschehen der Zeit hat auch die Jünger der Deutschtumskunde an den hohen Schulen in seinen Bann gezogen. Aber die Wissenschaft von der Muttersprache, als deren Rückgrat immer die Grammatik gelten muß, wird ihre alte Stellung in der Deutschtumsforschung in Bälde zurückgewinnen, ja darüber hinaus eine neue, erhöhte Wertschätzung erfahren, die ihrer gumdlegenden Bedeutung für das Geistesleben des Volkes entspricht ——— In eine deutsche Sprachlehre gehören meiner Überzeugung nach deutsche Fachausdrücke.“ (E. Gierach, Vorwort zur 13. Auflage der mittelhochdeutschen Grammatik von H. Paul.)

このように，外部から言語の研究にもちこまれた独訳の文法用語は，造語の要素が外来のものであるから，ただその理由で，これをドイツ語に改めようとするにすぎなかったようである．ところが，外来語に代る純ドイツ的な術語によって，往々，文法範疇の解釈を迷わすか，一方的な解釈をさせる結果になることは，なんと言っても否定できない．(Z.B. Dingwort für Substantiv, Tätigkeitswort für Verb, Leideform für Passiv Sprachlehre für Grammatik usw.) 殊に，これらの名詞からの派生語，即ち，形容詞や動詞を造る場合に，これまでに確認された外来語の術語よりも，ずっと廻りくどい，又奇妙な語形が必然的にでき上ることも，人のよく知るところである．(Z. B. verhältniswörtliche Umstandsbestimmung für präpositionales Adverb, Vereigenschaftswortung für Adjektivierung usw.) なお，現在の構造主義的文法の先駆者として，既に30年代のドイツにも，文法用語をその範疇から改めようとする試み，即ち，人文主義の時代からドイツ文法に受け継がれた古典文法の範疇に代って，ドイツ語の構造にもっと適合した新しい考察法を見出そうとする有益な試みも認められた．(Z. B. K. Boost, Arteigene Sprachlehre 1934; E. Drach,, Grundgedanken der deutschen Satzlehre. 3. Auflage 1940; H. Glinz, Geschichte und Kritik der Lehre von den Satzgliedern in der deutschen Grammatik. Wirkendes Wort. 1947 等参照) それで，嘗て E. Engel が熱情こめて要求した „Entwelschung der deutschen Wissenschaftssprache“ は，これらの学者が遂に実現できると信じたが，併し，全体としてみれば，これという成果が得られなかったようである．

次にドイツの国語浄化，又は外来語排斥運動は更に最高の，又最後的な段階に到達した．しかも，これは1936年以来はじめて，本来の意図からはなれたユダヤ排斥運動となった．これまで外来語をドイツ語から追放しようとしたのは，外来語の中に，往時のドイツ人に対する外国支配の残存を

認めるか，又はドイツ人自身の品位を汚すような屈辱の印であると解したからであった．所謂ドイツ気質やありかたを守ろうとするこの戦いは，ラテン語，ギリシャ語，フランス語が以前から，文化的に優勢なことに対して，向けられたものである．従って，この目標や動機は，17世紀，18世紀以来，ドイツの国語浄化論者が行ったことと殆ど変らないものであった．ところが，1936年，即ち，Nürnberg法が成立してから，まもなく，反ユダヤ運動という人種的な動因がこれに加わることになった．

第一に，この新しい気運を協会誌にもちこんだのは Gießen 大学の Germanist, Alfred Götze であった．この Götze は1936年1月号の誌上で，Kluge, Etymologisches Wörterbuch に協力していた時に，極めてささいなことをとり上げて，これを問題にしている．即ち，それは，Berlin からでた20年代の流行語の一つである keß という語の語源であって，この語は1807年以来，例証されている詐欺師の隠語，更にユダヤ人ドイツ語からきたものとされている．言うまでもなく，Götze は言語史家として，隠語とユダヤ人ドイツ語とは別のものであることをよく知っていたが，ユダヤ的なドイツ語からでた語を用いることを歎いて，„Gottlob hatten wir wieder gelernt, daß wir Germanen sind. Wie verträgt sich damit die Pflege einer im jüdishen Verbrechertum wurzelnden Unsitte?“ (Muttersprache. 51. 1936. Sp. 7f) と述べ，同系統の語 (Z. B. berappen, beschummeln, Kittchen, Kohldampf, mies, mogeln, pleite, Schlamassel, Schmu, Schmus, Schoffel, Stuß usw.) に注意することをすすめ，最後に，自らの語彙をユダヤ人街や場末の飲み屋から補うことはドイツ人らしくないと主張するに至った．Götze がこのように，この種の語を排斥するのは，これらの語が，現代では文体上，低い価値をを有し，低俗な事物を示すからではなく，単にそれらの語がユダヤ的で，詐欺師の隠語に由来するからというのであった．

これらの語は，言語的な教養のない一般大衆の意識には，だらしのない

俗語と感じられているが，決して外来語，又はユダヤ系の語と思われないものである．併しながら，Götze はこれらの語にまで，国語浄化主義の要求を貫徹しようとした第一人者であった．知名の大学教授をはじめ，多くの人々が，ユダヤ系であるために，迫害を受けた当時，Götze は，祖国愛の精神から，国語を尊重する人々に，国粋的な国語浄化の問題を，法令にまでなった人種論と結びつけるのに適していたことを指摘するのが，正しいと信じたのであった．ところが，1800年頃のユダヤ人解放以来，ユダヤ系ドイツ人はもはやユダヤ的ドイツ語を話さなくなっていて，事実ユダヤ的ドイツ語から由来するか，又は誤解されている語の多くは，18世紀乃至19世紀以来ドイツの口語では一般によく知られている．（これについては，Kluge-Mitzka, Etymologisches Wörterbuch. 18. Auflage 1960; Duden-Etymologie 1963; H. Küpper, Wörterbuch der deutschen Umgangssprache 3 Bände. Hamburg 1955—64 参照）これは一学者の方法論上の謬見によって，言語の現状を批判するために，語源，即ち，語の由来を問題にして，言語の現在の文体上，又は言語社会学的な使用価値を無視したからであると言わなければならない．この謬見は政治的にも影響を及ぼしたので，これに対して現代語考察の方法論は極度に警戒を要するものである．

この Götze の語源的な見解はその後も，協会の研究誌では後をたたなかった．一部の人々は同じような意見を述べて，Götze に劣るまいと努力したようである．この傾向は恐らく Götze からの刺戟とは無関係に，まもなく悪化して，国語運動全体が一般に人種的な動機によるものと変っていった．例えば，„Muttersprache“(52. 1937)に寄せられた一論文は略語に対するもので，この傾向をもユダヤ的な一現象とみなしている．1941年6月16日の政府指令でも，Akü-Wort の使用は „unerhörter Mißbrauch jüdischer Herkunft“ と明示され，禁止されたのをみても，この間の事情は明らかになる．併しながら，皮肉なことには，Fr. Tschirch, Wachs-

tum oder Verfall der Sprache II. Teil. (In: Muttersprache 75. 1965, S. 164ff.) が言うように，事実は，皮相的な言語評論が，Akü-Wort はナチに由来すると考えるのも無理がないほどに，当時の第三帝国では，特に Akü-Sprache が愛用されていたようである．

このように，国語浄化の問題と人種的謬見とを結合する傾向は次第に嵩じて，これまで単に俗語にみられる少数のユダヤ系の語を指摘したのに対して，更に一歩前進し，„Muttersprache“ に執筆した人々の一部は，外来語の問題を人種論的な立場から取扱おうとするに至った．即ち，Götze の論文が出た次の号 (Muttersprache 51. 1936. Sp. 47) に，恐らく Götze とは関係なく，Rasse, Sprache, Fremdwort に関する論説が公表されたのである．この中で，ゲルマンの語根綴の強音の法則が脅かされ，多数の語の最後の綴に強音があるのは，ドイツ語に多量の外来語が侵入した結果であるとまで主張された．この一門外漢の主張に対して立ち上ったのが，当時のドイツ語学の長老で，協会の名誉会員でもあった Otto Behaghel であった．Behaghel は仮借なくこれを批判したが，(Muttersprache 51. 1936. Sp. 184f) 当時の一般状勢を配慮したのか，根本の人種的論議には触れないで，ただアクセントの法則，語順，語尾の消失，子音推移等に関する具体的な誤りを指摘することにとどめたようである．次で，Zeitschrift für Deutschkunde の編集者で，反ユダヤ的な文学史の論文を公表した Walther Linden は，同じ年の協会誌にのせた論文 „Was heißt Sprache unserer Zeit?“ (Muttersprache 51. 1936. Sp. 277ff) で，外来語の問題を直接にユダヤ人排斥論と結びつけようとした．この Linden の後，まもなく，Wien の協会々長 Karl Tekusch が „Sprachgebrauch und Sprachechtheit“ (Muttersprache 51. 1936. Sp. 321ff.) で，一般の Sprachgebrauch を是認する Behaghel や Duden-Herausgeber 等の所謂 die zünftige Sprachwissenschaft を代表する人々を Sprachstatistiker と罵った．(これは D. Sternberger, Gute Sprache und böse

Sprache. Neue Rundschau 74. 1963. S. 403ff. 等にみられる記述的言語研究を酷評した態度と全く同一のものと言えるだろう．なお，この問題については，Peter von Polenz, Sprachkritik und Sprachwissenschaft. Neue Rundschau 74. 1963. S. 391ff. を参照）これに対して，Behaghel の後継者 Alfred Götze (Muttersprache 51. 1937. Sp. 328ff.) や Arthur Hübner (Muttersprache 52. 1937. Sp. 3ff.) がその誤りを是正したが，両者とも，人種論の問題には触れなかったようである．更に，1937年に，Stuttgart に於ける協会の聖霊降臨祭の会議で，Erlangen 大学教授 Ewald Geissler は „Sprachpflege als Rassenpflicht" (Muttersprache 52. 1937. Sp. 258) と題する反ユダヤ的な国語浄化の講演を行ったが，これはその後まもなく，協会の „Flugschrift Nr. 1" として，協会の布告のように賞讃された．この中で，Geissler は外来語による民族解体論をユダヤ系作家，例えば，Th. Mann, Fr. Werfel, W. Hasenclever, L. Feuchtwanger, St. Zweig 等の作家の例によって立証しようとし，ユダヤ的ドイツ語を排撃して，ドイツ語の純化に努めることを要求した．その他，Muttersprache 53. 1938. Sp. 372ff. 等にみられるように，Döblin や Heine 等に対する反ユダヤ的な見地からの外来語論難もつづけられたが，当時，既にドイツ語浄化運動の断末魔はその頂点に達していたようである．即ち，Geissler のパンフレッドが出る以前から，協会の危機が叫ばれていた．国語浄化運動とユダヤ排斥運動とを結びつけることは不合理であることが論証され，世の物笑いになっていたのである．折悪く，抜目のない一協会員が，次のような驚くべき，重大な事実を確認した．それは多数の純ドイツ人の中に，一ユダヤ人が活発な国語浄化運動の急先鋒をもって，自ら任じていたという全く予想外の一大事実であった．それは余人ではなく，協会がその功によって，名誉会員に任じた，Wilhelm 帝時代では国語浄化論の第一人者であった Eduard Engel その人であった．この Engel は全く皮相的な見解で，不当にも，外来語の問題に vaterländische

Gesinnung や Deutschheit を規準にしたので，こうなると状勢は忽ち一変して，もはや外来語の使用でなく，浄化論者の所謂 „Fremdwortjagd“ 自体がユダヤ的な事柄と解されることになった．

一協会員のこのグロテスクな転倒は当時の協会に危機が迫っていることの徴候であった．1933年から，37年までの間に，国語協会は，一般社会から，忌避されるようになり，1937年には，協会や外来語追放に対するナチ幹部の不満が明らかに認められた．このように，協会の活動に対する非難，攻撃の声が一般に高くなったので，協会が予定した Stuttgart 聖霊降臨祭の会議も，やむをえず一時はとりやめることになった．最初から協会の行動に対して，極めて控え目な態度を示した宣伝相の Goebbels は 1937年5月1日に，Berlin でのドイツ文化省の定例会議の席上で，これ以上の災いを防止しようとして，国語浄化論者に対して，厳重な警告を発するに至った．これがために，当時の協会理事長 Dr. Buttmann は Stuttgart での会議の開会の辞で，全面的に降伏せざるをえない立場に追いやられたようである．(Muttersprache 52. 1937. Sp. 254ff. 参照) 先ず Buttmann は，協会の闘争は，又しても誤まって喧伝されているように，第一に外来語使用に関するものでないことを声明したが，彼自らもなんらの根拠もない独訳や語の創造，又外来語使用の度合から，祖国愛の精神の有無を論じることの愚を悟ったようである．Stuttgart に於ける聖霊降臨祭の会議での重大な危機はよほど強い影響を及ぼしたものと思われる．この時から，„Muttersprache“ によせられた外来語の問題やそれに対する論難はますます稀になり，度をこえなくなってきた．特に戦時中は，この論議も，全くなりを静めたようだが，ヨーロッパ各国の占領後は，これまでより一層に全ヨーロッパ的に考える必要を感じたようで，人々はドイツ語の超民族的な使命をも考えて，遂に外来語の生活権をも認めようとするに至った．(Muttersprache. 52. 1937. Sp. 289ff ; 56. 1941. Sp. 101f. ; 57. 1942. Sp. 160f. 参照) 又従来のドイツ文字が廃止されたのも，この頃で

あった．更に，H. Wehmeyer (Die neueren Sprachen. Muttersprache 50. 1942. S. 41ff.) は，協会の独断的な見解，即ち，外来語を愛用することはドイツ人性格の欠陥であり，他のヨーロッパ語はドイツ語ほど多数の外来語を有していないというこの見解に対して，英語，フランス語，スペイン語，オランダ語，ロシヤ語等でも，外来語の数は殆ど変らないことを実証し，ただこれらの言語で，ドイツ語のように目立たないのは，これらの言語集団が，外国からの文化的影響に対して，寛大であり，これをとり入れるとともに，これらの外国語を適切な方法で，自国語に同化させたからであると主張するに至った．最後に Hitler 自身も，この種の暴力的な独訳を好まなかったようで，長く用いられてきた外来語に対して，ドイツ語の精神から出たものでなく，又外来語の内容を十分に再現できないような，いかにもわざとらしい代用物を認めない旨の次の告示を公表させた．

„Nach einem Rundschreiben des Reichsministers und Chefs der Reichskanzlei ist dem Führer in letzter Zeit mehrfach aufgefallen, daß—auch von amtlichen Stellen—seit langem in die deutsche Sprache übernommene Fremdwörter durch Ausdrücke ersetzt werden, die meist im Wege der Übersetzung des Ursprungswortes gefunden und daher in der Regel unschön sind. Der Führer wünscht nicht derartige gewaltsame Eindeutschungen und billigt nicht die künstliche Ersetzung längst ins Deutsche eingebürgerter Fremdworte durch nicht aus dem Geist der deutschen Sprache geborene und den Sinn der Fremdworte meist nur unvollkommen wiedergebende Wörter. Ich ersuche um entsprechende Beachtung. Dieser Erlaß wird nur in Deutsche Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung veröffentlicht.

Berlin, den 19. November 1940

Der Reichsminister
für Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung
I. v. Zschintzsch."

(Deutsche Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung, Amtsblatt 6. 1940. S. 514. Nach von Polenz)

この総統の告示によって，ドイツの外来語追放運動自体も公式に追放されたわけである．これで，いよいよ国語浄化運動も最後になった．即ち，この運動は，それが本来奉仕しようと思っていた政治権力の方から禁止されて，これに終止符が打たれることになったわけである．

以上は，v. Polenz の二論文と1933年から，44年までの国語協会の機関誌 „Muttersprache" に従って，その要旨を略述したにすぎないが，これまでにみたように，当時国語を愛する人々には，ドイツ語の浄化がナチ本来の意図でなかったことを全く知らなかった．むしろ，政府はただ政治目的のためは，最初はこれを黙認し，次に，これを巧みに利用したわけである．勿論，特殊な場合に，外来語よりも，ドイツ語を用いることを奨励したこともあるが，これとても政治的な根拠からでたもので，多くの場合には，好んで外来語を用いたといわれている．このように，国語浄化の理念が Hitler や Goebbels の意図や方針に反したことを Romanist の Viktor Klemperer は既に見抜いていたようで，この Klemperer の見解については，Hugo Moser, P. v. Polenz をはじめその他の人々も引用している．Klemperer はその Lingua Tertii Imperii (1947) で Hitler と外来語の問題について，次のように，

„Was Hitler furchtbar genau kennt und in Rechnung stellt, ist stets die Psyche der nichtdenkenden und in Denkunfähigkeit zu erhaltenden Massen. Das Fremdwort imponiert, es imponiert um so mehr, je weniger es verstanden wird; in seinem Nichtbegrif-

fenwerden beirrt und betäubt es, übertönt es eben das Denken." (S. 267)

と述べて，更に Goebbels については，次のように評している．

"Goebbels, der dem Volk aufs Maul zu sehen sein oberstes Stilgebot nennt, weiß auch um diese Magie des Fremdwortes. Das Volk hört es gern und wendet es selber gern an. Und es erwartet es von seinem >Doktor<." (S. 268)

国語浄化論者のこの悲劇的な誤謬の原因を究明しようとする von Polenz によれば，この原因は決して外部から，即ち，政治的な圧力からくるものでなく，むしろ，言語考察のイデオロギーや方法論の誤りにみられる文化政策的な運動の根元にあることになる．そこで，von Polenz はこれらの国粋主義的な言語批評家が犯した誤りは，その大部分，ドイツの言語研究の一般的な方法論史に由来するものと断定するに至った．

von Polenz も言うように，外来語追放論の人々は，言語に対して，凡そ現実からかけはなれた関係にあったようで，この点に，これらの人々の根本的な誤謬が認められる．これに対して，実際に政治に関与していたナチの幹部はこの国語浄化運動を無視して，言語が現在の通用価値に拘束されるものとしての観点から，これを評価し，更に又操縦すべきものであることをよく知っていたのである．現用の語をその語源から評価しようとした国語協会の人々には，文体や言語社会学的な見地からみた語の „Hier und Jetzt" などは思いもよらぬことであった．H.L. Koppelmann (Nation, Sprache und Nationalismus. 1956, S. 97, 98) の言葉はよく引用されるが，それによれば，一般に表現や諒解の手段になる言語も，非合理的な国粋主義者からみれば，むしろ，„ein nationales Idol, dem man möglichst ostentative Ehrenbezeugungen erweisen soll." であって，またその上に，これらの人々は人間の目的と無関係な „Echtheit" というものを言語に要求している．これは，現在もまだ言語評論家の中にみられ

るように，国語浄化論者が，言語を „ein mystisches Wesen“ として，これに仕え，又これを守る義務があると考えたからであった．

次に，現用の語をその由来から評価しようとする傾向について，その原因を追求する von Polenz の意見によれば，これは単に外国語に対する反感からくるのではなく，言語の問題に関心をもつ人々の多くは，少くとも若い頃，伝統的な文献学派の感化を受けたので，言語評価の場合に問題になるのは，文化社会学的な一現象であると言える．これは前世紀の教養史や科学史とも多少は関係があるものとみられている．

従って，なぜその道の権威と言われた人々までが，この国語運動を阻止するどころか，むしろ，それに心酔して，参加したのかということが問題になるだろう．このような態度は単に個人の政治的見解や時代精神の影響から理解されるものではない．ここで von Polenz が重視するのは学者の決断と行動に対する方法論上の前提である．そこで，科学史は先ず方法論の歴史であると言われるのも当然のことだろう．

言うまでもなく，ドイツ語学は，前世紀末の特に Paul や Braune を中心とする少壮文法学派によって，一般の言語研究にも，甚大な影響を及ぼし，模範的な科学とされていた．今世紀の前半ばかりでなく，現在もなお，ドイツ，フランス，イタリー，オランダ，アメリカの研究の一部は，当時の方法や成果の恩恵に浴しているが，そのことには今後とも変りはないだろう．（拙論 Hermann Paul と現代のドイツ語学—20世紀ドイツ語学史の研究—ドイツ文学，関西大学ドイツ文学会1967年参照）．併しながら，ドイツ語学研究の一部では，今もなお，前世紀の歴史的，文献学的な言語研究の基範が固守されているのは，全く一方的と言うべきである．尤も，当時でも，既に，過去の文書を基礎として，個々の言語要素を分析する史的考察のみが，言語学のすべてでないことを認めた学者も少しはあったようである．そこで，生きた話し言葉の状態を研究するには，むしろ社会学的で，構造的な関係が重要であることを教えたのが，ローマンス言語

学の構造的な言語地理学であって，これが言語の研究に，新しい方法上の道を示したのであった．

周知のように，言語を記号の組織とみて，一時代の言語状態の構造を分析する Ferdinand de Saussure の新しい言語学方法論の理論的な基礎は，20年と30年代に，チェコ，デンマーク，アメリカをはじめ，フランス，イギリス連邦，オランダ，ソ連，日本等，多くの国々に多大の影響を与え，現代語の研究を有意義に促進した．これに反して，ドイツでは，戦争の結果ではあるが，Porzig, Weisgerber, Trier 等少数の例外を除いて，多くの学者が長い間，それを知らなかったのは，誠に遺感とされている．このことは，1931年に，Lommel の独訳 Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft がはじめてでるまで，その書評が殆どでなかったこと，(これについて，G. Helbig, (Geschichte der neueren Sprachwissenschaft 1970) は「ドイツで批評したのは僅か一名」と記し，von Polenz は皆無と主張している.) 又日本ではそれよりも早く，1928年に小林英夫氏の邦訳初版がでて，その後度々改訂を重ね，1972年に25版を出版し，今もなお盛んに愛読されているのに反して，ドイツでは，1950年代からよまれていること，即ち，31年にでた初版が30年余り経て，1967年 (von Polenz によれば，66年) に，やっと500部を売りつくして，再版を出した事実をみても明らかになる．更に，von Polenz は，Weisgerber でさえ，その Sprachwissenschaftliche Methodenlehre (In: Deutsche Philologie im Aufriß, herausgegeben von W. Stammler. Bd. 1, 2. Auflage 1957) で，de Saussure の名をただ一度しか述べていないと歎いているが，この道の先駆者である Weisgerber は，von Polenz が生まれた翌年，即ち，1929年の古典的名著 Muttersprache und Geistesbildung をはじめ，Grundzüge der inhaltbezogenen Grammatik. 4. Auflage 1971 その他の論文，著書でも，度々 de Saussure の偉大な功績を正当に評価していることを付記しておきたい．(なお，de Saussure と

Weisgerber の関係については，拙論 Ferdinand de Saussure と現代のドイツ語学．1966年ドイツ文学論攷，阪神ドイツ文学会参照）このように，de Saussure をはじめ，現代の外国の研究をとり入れるのがおくれたために，一般にドイツの学者が，外国の文献をよんだり，国際会議に出て，方法論の問題や術語で，理解が困難になり，ドイツ学派の孤立が云々されることがよくあると言われるのも事実のようである．（これについては，特に，P. Hartmann, Modelbildungen in der Sprachwissenschaft. In: Studium Generale. 1965. 6. S. 369; K. Baumgärtner, Syntax und Semantik. In; Deutschunterricht für Ausländer. 1967. 2/3 S, 57 等を参照）

併しながら，他方では戦前ドイツの研究も，新しい言語学に極めて有益な寄与をしたことをも認めなければならない．特に，外来語の問題をとり扱う辞書編集の方面では，既に，記述的，構造的な考察法への著しい傾向がみられたようである．(Porzig, Trier, Weisgerber, Dornseiff, Mitzka 等の研究を参照)．残念ながら，これらの研究も，大部分は戦後はじめてその影響を及ぼしたのであった．従って要するに，30年代の語彙の研究は依然として，個々の語の歴史とその語源が中心になっていた．

この方面の研究で，当時，最も傑出していたと言われた Götze が，協会誌 „Muttersprache“ で外来語の問題について，自らの態度を表明するとなると，語の語源という歴史的な問題提起によったのは，全く当然のことであった．一般に言語の研究では，語彙組織の関連で，外来語が類義の純ドイツ語とどんな関係にあるかということを問題にして，一時代の言語状態を考察するのであるが，Götze はその由来に応じて，外来語の現代の通用価値を批判した．即ち，純記述的共時的な一時代の問題に，歴史的な確認をもって答えたのであった．

このように，歴史的な原則によって語を評価する態度が現代の研究で問題にならないことは，これを全面的に否定した次の Mackensen の言

葉でも明らかである．

„Ist die Einsicht in etymologische Zusammenhänge eine Regulativ für sprachliches Wohlverhalten?“ (Traktat über Fremdwörter. 1972. S. 8)

Götze のこの態度は，近世ドイツ文化史からみて，極めて重要な意義をもつ文化，政治，経済方面の外来語，又は外国語の造語綴をもつドイツ語ができるだけ省かれている Trübner のドイツ語辞典に最もよく現われている．

従来，ドイツは外来語辞典を好む国とよく言われているが，それは，ドイツ語に，他の文化言語よりも，遙かに多くの外来語があるからでなく，他の国では，転用の言語財のすべてを転来語（Lehnwort）として，普通の辞典か，又は他の難解な語，専門語と一緒に特殊辞典に収めているのに反して，ドイツでは，これを一切外来語辞典に入れたからである．（A. Thomas. Dictionaire de dificultés de langue français. Paris 1956; R. H. H. Hilb, A Dictionary of difficult words. New York 1959 参照），（なお，これについては E. Leisi, Das heutige Englisch, Wesenszüge und Probleme. 4. Auflage 1967. S. 58 参照）特に前世紀の史的研究以来，過去 2 世紀に転来した語は，Lehnwort とは認められなかったので，ドイツ語の辞典には収められなかった．即ち，Deutsch という概念は一方的に歴史的に解されたのである．

この一方的な考え方は，歴史主義や保守主義とも多少関係があるもので，他の領域，即ち，社会政治の方面でも，人の素性や経歴を重視して，その過去から，現在を規定しようとする同じような傾向がみられる．このように，個々の語の由来からみて，現代語の語彙の構造を分析することは，言語の変遷と言語状態の研究とを混同する方法論上の誤謬によるものと言うべきである．よく混同されているようだが，de Saussure 自身も明記しているように，diachronisch と historisch とは全く同一の概念で

はなく，史的研究でも，言語の変遷を取扱う通時論と過去の一時代の言語状態をみる共時論とが区別される．もっとも，de Saussure が要求するように，両者を判然と区別することが困難な場合もあるが，言語の変遷と一時代の言語状態の考察とは全く別なものと言える．従って，言語史や文化史で重要な外来語の由来，時代，使用範囲，その精神的な作用等は，現代語の研究では全く問題にはならない．又一言語の現状とその内的組織を対象とする純共時的考察では，史的変遷でのみ意義のある Fremdwort か？ Lehnwort か？という問題が重要な役割を演じていないことも当然である．ここで通用するのは，内容，文体，特に言語社会学的にみて，語を分類することである．

従来の語史では，年代，音韻形態，語形変化等の同化という形式文法の原則によって，Fremdwort と Lehnwort の差異を定義したが，この問題は語形の外面的な基準で解決できるものではない．これがどれほど複雑で，困難であるかということは，„Die Unterscheidung zwischen Fremdwörter und Lehnwort ist weitgehend eine Fiktion.“ と言った Mackensen (Traktat über Fremdwörter 1972. S. 16) の言葉によっても明らかになる．von Polenz 等が言うように，むしろ，一言語の現在の状態で重要な問題は，話す人，その相手，周囲の状況，事柄の関連，前後関係，その語が属している語野内の他の語の内容と比較して，内容や文体からみて，どんなあやがあるかと言うことである．

このように両者の識別が困難なために，von Polenz は Fr. Seiler のように，これらに Lehnwort という語を，Weisgerber や Mackensen は Rechtsmann のように Fremdwort という表現を一括して用いているが，いずれにしても，この問題全体には新しい分類が必要である．即ち，その現状からみて，現代ドイツ語の語彙の構造を秩序立てて，並列させる必要がある．このような新しい分類をはじめて試みたのは Leo Weisgerber (Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege. 1960.)

であった．この点で，Weisgerber は現代ドイツの外来語の問題を新しい見地からとり扱った第一人者と目されている．これについて，von Polenz (Fremdwort und Lehnwort, sprachwissenschaftlich betrachtet. 1967. S. 73) は，次のように述べている．

„Einen solchen Gruppierungsversuch hat vor einigen Jahren Leo Weisgerber in der Muttersprache vorgelegt. Er war damit der erste Fachwissenschaftler, der nach dem blamablen Niedergang des deutschen Sprachpurismus, nach der hierauf eingetretenen Stille und nach der Neugründung der Gesellschaft für deutsche Sprache an dieser Stelle zum Fremdwortproblem grundsätzlich Stellung nahm.——Das sind synchronische Antworten auf die synchronische Fragestellung."

併しながら，なぜ1937年以来ドイツ国語協会が外来語の問題について，控え目になったのか，その理由を Weisgerber が明らかにしているにも拘らず，von Polenz は述べていないと主張し，又 Lehnwort という概念をさけたことを遺憾としているが，この論文で，Weisgerber は先ず，外来語の危険地帯の現状と，言語育成の方面からみた外来語の問題全体を考察しようとして，外来語の価値段階の分類からはじめたのである．即ち，その価値からみて，外来語を „schädlich" から „hinderlich," „fragwürdig," „überflüssig," „neutral" を経て，„nützlich," „notwendig," „echte Bereicherung" に至るまで，分けてみたことは，たとえ，個々の点で，異論はあるにしても，von Polenz も言うように，これまでの評価の問題提起に対する極めて適切な慶ばしい回答ともいうべきものだろう．しかも，この段階の肯定的な面で，その内容から，転来語とそれに該当するドイツ語との比較は転来語を正当に評価する有益な指示となっている．ではここで，これらの段階について略述することにしよう．

先ず Weisgerber は自国の語の地位を奪うものを „schädlich," ドイツ

語の語形の成立を妨げるものを „hinderlich“ とよび，理解に困難なものを „fragwürdig“，単に外国の雰囲気を模倣しようとするものを „überflüssig とみている．

次に，良くも悪くもない，„neutral“ とでもよぶことができる広い範囲の外来語がある．これはなくてもすむが，„harmlos“ とは言えないまでも，危険はなく，又全く余計でもないものである．危険よりも，むしろ，有利な場合の方が多いということになる．

さて，外来語が応急手段として „notwendig“ と認められるのは，事態が要求する地位を占める場合である．この地位に対して，自国語に適切な表現がないので，少くとも納得できる解決がみつかるまで，この種の外来語は認めるべきである．(Ernst-Günther Geyl, Muttersprache 77 Jhg. 1962. Heft 2 参照)

各方面の著しい進歩によって，多数の新語が必要となるのは当然であるが，この場合に，もし，略語によらない限り，従来の語から，新しいものを造るか，又は外来語によって表現されるが，外来語の方をとるとなると，これを „kleines Übel“ として認めることになるだろう．この点からみても，近来，外来語に対する批判が変ったことも理解される．これに対して，Weisgerber は派生語を造る方法を復活するか，方言の語幹を標準語にとり入れるかして，ドイツの新語をつくる源泉を聞く以外に，方法はないとみている．

外来語が必須の課題とされるのは，外国の精神活動を検討する必要が生じた場合である．この場合にも，言語内容に関する考慮が必要となる．凡そ，各言語というものは，関係なく並存することはない．むしろ，多数の言語が存在する意義は，互にその内容を豊富化する点にある．ここで，言語内容に対する洞察が改めて強化される．即ち，言語が相違するという核心的な事実は，最近になって一般に認められてきたように，言語内容の差異であるとみられている．この差異は同時に，特殊性を前提とするもの

で，どの言語も，常にその特殊性の進展とこの差異を徹底的に活用する緊張した状態で現存している．一般には，2ケ国語の語彙，即ち，2つの語形を同価のものと考えて，これらの差異の融和を図っているようである．併し，この部分的な一致が十分でないことは言うまでもない．我々がみる外来語の中でも，その内容の特異性が国語では言いつくせないものがある．このような内容の特性を，国語でも注意して観察する価値があるかどうかという問題は徹底的に検討すべきである．この種の外来語は話題になっているべきだろう．

都合がよければ，これが実際に言語の内容を豊富化することになる．ここで我々は再び最近復活した言語の本質に関する基礎的な認識に立ち戻ることになるだろう．言語相違の事実を人間生活の必須の条件とみるこの見解は，既に von Humboldt の思想に明確に表現されている．どの言語も，その内容の働きからみて，精神の力で世界に接近し，それを把握し，解明しようとするものである．又どの言語集団も，人間が達し得る世界を理解しようとする道を，その国語に拓くものである．この道は，これら人間の運命に相応したもので，あくまでも一方的であり，断片的，部分的な真理にすぎない．その全体からみた言語によって，はじめて，人間の言語による認識の集計が包括される．このようにみてゆくと，言語間の精神的交流の必然性が論証される（この見解については，拙論「Humboldt-Weisgerber の言語本質論からみた民族の言語問題について」関西大学ドイツ文学会編，ドイツ文学第16号1971を参照）．言わば，この交流は，一言語集団の成果が他の創造のためになる条件でもある．このように，外国の言語財をとり入れることには，真に自国語の内容を豊富化する可能性があり，特に，真の豊富化は真摯な努力を伴うものである．しかも，事実，豊富化するためには，その外来語は時としては幾世紀もつづく同化の努力を必要とする．それでこの努力をつづけてゆくうちに，はじめて，どの形式で外国語をとり入れるのが最も有効であるかが明らかになる．併し，それ

は予め言えないが，いずれにしても，決定的なことは，その語が確定した精神的地位を保持していることで，次に外国の音韻形態も克服され，転来語の形式で，内容を豊富にする働きが生じるわけである．

このような観点から，外来語の問題をみてゆくと，外来語の排斥が以前ほど行われないことがよく理解される．言語の育成も，常にこの問題全体を留保し，外来語が適当な限界を越えないように，あらゆる手段を講じることになるだろう．特に言語の育成は，言語固有の力を強化しようと努めるもので，よく引用される次の Goethe の言葉，即ち，

„Die Gewalt einer Sprache ist nicht,
daß sie das Fremde abweist,
sondern, daß sie es verschlingt.“

(Maximen und Reflexionen 72, 73)

によれば，言語の力は外国の言語要素が自国語の内容を豊富にする限り，それを斥けることなく，むしろ，それをのみこむものである．(Goetheの外来語観，特に，その「肯定的浄化論」(affirmativer Purismus) については，拙論「ゲーテと外来語の問題，特にその affirmativer Purismus について」関西大学文学論集第4巻第一号1964年参照）言語の育成は，言語を相互に豊富にするというこの思想を，現代の状勢からみて，果してその可能性があるかないかをよく吟味し，ただ頭から異国のものを拒否するか，又は反対に流行の（病的な）現象を甘受するか，この両極端の正しい中間をとろうとする．そうすれば，真に言語のために，努力している人々の助けをもえることができるだろう．外来語に対する過度の排撃はこれまで，正しい言語の育成に，利益よりも，むしろ多くの損害を与えたようである．これは単に言語集団の交流に当った人々だけでなく，極めて重要な外来語の問題を遙かに大きな問題圏の一断面にすぎないとみる人々の場合にも言えるだろう．

ここで Weisgerber は言語育成の全範囲内で外来語の問題が，どうな

っているかを明らかにするために，先ず，この事態の特徴を示すものとして，3つの経験をあげている．

a）現代の標準語は，それを使用する人々の創造力に日日，多大の要求をするので，我々の努力の重点が言語の力全体の強化にあるのは当然のことである．それで益々増加する精神的，物質的な所産を表示するに十分の語彙をえることがいよいよ困難になってくる．この場合にも外来語をよく吟味する必要はあるが，我々が適当な時期に，確信をもって，それに対して，もっとよいものを提案できるのが条件である．即ち，言語の作用力全体を高めることが重要だと言えるだろう．そこで重要な問題は，自国の言語財の新しい源泉を拓き，自由に使用できる手段を徹底的に活用し，拡大することである．このようにして，自国の言語資料を準備しておけば，外来語の汎濫に対しても，内的な限界をおくことにもなるだろう．この限界は個々の濫用を外的に排撃するだけではえられないものである．

b）今日の標準語はもはや我々の手に負えなくなりかけている．文語が一千年も発達し，益々広い生活領域を言語によって拡大してから，個々の人間がその精神力で，この言語の世界全体をこなすことは不可能である．その結果，一言語集団内の人々が，いよいよ離反することになる．各人が制御できる断面が一致することは極めて少ない，凡そ，国語というものは，それを所有する人々の全言語力の結晶であるから，国語の確実性とその内的な団結は根元から脅かされている．言語の育成は少くとも，核心的な領域で，最小限度の共通性と協力を確保しようと試みているが，この課題に総力を集中させる必要がある．勿論，この努力は，その作用に重要な言語の核心がまとまっていればいるほど有効なことは明らかで，ここで外来語の問題も適宜に取扱われることになるだろう．

c）第3に，言語表現の意欲が衰えていくことは現代の特徴となっているが，ここに最大の危険が認められる．（これについては Weisgerber と同じ見解を示している Hermann Villiger, Bedrohte Muttersprache.

1966年参照）過度の要求は言語の力をそぎ，言語の交流を益々不十分にさせ，しかも厄介なものに思わせるが，言語表現の意欲が衰えることは恐らく，この過度の要求と関係あるものと思われる．いずれにしても，現代人は益々多く絵，週刊グラビヤ誌，映画，テレビ等に逃れてゆく．（これについては，交通信号，便所の表示等参照）これに応じて，世界を言語によって検討し，解明することは次第に後退している．現代は言語荒廃の時代と呼ばれるのも当然であるが，これの主要な根源はこの言語意欲の衰退にあると言えるだろう．これとても，その付随現象として，外国語や外来語使用のいろいろないかがわしい形式を含んでいる．併し，この場合には，単に徴候からではなく，その根元から，これらの病的な現象に立ち向う必要がある．この言語の荒廃を防止するためには，あらゆる力を結集すべきであるが，このことは非常に大きな，しかも極めて困難な課題である．それで我々が現在，一般的な情勢に直面して，言語の風潮全体の健全化に努力すべきことは言うまでもない．これまでの経験が確証しているように，国語に対する適切な根本的態度から，正しい中庸が殆ど自然にえられるのであって，ここから，外来語からの弊害もさけられ，又外来語を徹底的に利用する多種多様の課題もとり上げることができるのである．

外来語の問題についての Weisgerber の見解の要旨は以上のようであるが，これに対して，„Synchronische Antworten auf die synchronische Fragestellung“ と激賞した von Polenz 自身が特に，„schädlich“ と „hinderlich“ の項で，Weisgerber が Synchronie と Diachronie との混同の結果，いかがわしい例を出していると次のように批判している．

„Unbefriedigend und z. T. irreführend ist die Synchronie und Diachronie vermischende Gruppierung bei L. Weigerber, das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege, in: Muttersprache 70. 1960. S. 1ff., wo z. B. in der Kategorie>schädlich<Wörter wie Onkel, Tante, Hobby eingeordnet werden, weil sie die heimischen

Wörter Oheim, Muhme, Base, Steckenpferd, Liebhaberei ≫ihrer Lebenskraft ≪berauben, oder in die Kategorie >hinderlich < ≫ pseudoantike≪technische Termini, die die Herkunft deutscher Erfindungen und Erzeugnisse, also die ≫Echtheit des geschichtlichen Bildes≪verfälschen. Die Wortbildungen der deutschen Fachsprachen sind keineswegs > pseudoantik < und die Sprache dient nicht der Geschichte, sondern den Bedürfnissen der Sprecher." (Peter von Polenz, Sprachpurismus und Nationalsozialismus. In: Germanistik—eine deutsche Wissenschaft, 1976, S. 164) (なお，P. von Polenz, Fremdwort und Lehnwort, sprachwissenschaftlich betrachtet. In: Muttersprache 77, 1967, 9, 73, 74 更に J. A. Pfeffer, Grunddeutsch und die deutschen Entlehnungen aus fremden Sprachen. Wirkendes Woit. 1973. S. 424 をも参照)

更に von Polenz は，ある言語状態に於ける一定の語の価値問題には，この状態にある語彙の共時的な分類が必要であり，言語生活での重要な問題は，一定の言語社会の集団の言語財と文体上の一定の様式の語の用法にみられるいろいろな意味構造であると主張している．さて，von Polenz の意見は一応もっともなようであるが，よく考えてみると，Diachronie と Synchronie を判然と区別することを，de Saussure は要求したものの，既に Prag 学派をはじめ，ドイツでは両者の融和を図ろうとした Germanist, J. Trier (Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes. Geschichte eines sprachlichen Feldes. 1931) や Romanist の von Wartburg (Das Ineinandergreifen von deskriptiver und historischer Sprachwissenschaft. In: Berichte über die Verhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Phil.-hist. Klasse 1931; Einführung in die Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft. 1943) にみられるように，この問題は

極めて複雑で，よく交叉することがあるので，簡単に対立させられない場合も往々認められる．そこで，Ernst-Günther Geyl (Sprache zwischen Sinnerstarrung und Sinnentleerung. In: Muttersprache 77, 1967 S. 196, 197) は，Synchronie の意義を重視しすぎる余り Weisgerber を批判した von Polenz に対して，次のように再批判を試みている．

„Die Sprachwissenschaft darf sich nicht selbst der Möglichkeit berauben, verschiedene Sichtweisen für die Sprachpflege fruchtbar zu machen. Peter von Polenz betont in seinem—sonst beherzigenswerten—Vortrag und Aufsatz Fremdwort und Lehnwort sprachwissenschaftlich betrachtet zu einseitig den Standpunkt der Synchronik. Zu welchen Widersprüchen dies führt, ergibt sich aus seinen Auseinandersetzung mit Leo Weisgerber auf S. 73, der nach von Polnz mitunter Fremdwörter aus zu starrer geschichtlicher Einstellung bekämpfe, während doch in Wahrheit geschichtlich Abgestorbenes nicht mehr lebendig erhalten werden könne und nur die heutige synchronische Zuordnung zur Wortschatzstruktur über den Wortgebrauch entscheiden könne. So beklage Weisgerber, daß das Wort Oheim durch Onkel verdrängt worden sei, während doch Oheim nur den Bruder der Mutter, nicht den des Vaters bezeichnet habe. Von Polenz erhebt diesen Einwand offenbar doch nur aus diachronischen (geschichtlichen) Überlegungen, die mit Synchronik nichts zu tun haben: Den etymologischen Wurzeln habe Weisgerber nicht Genüge getan! In Wirklichkeit schwemmt der Strom des Geschichtlichen vieles alte Sprachgut zu uns, das synchronisch oder logisch nicht einzuordnen ist. Es lebt überdies noch kräftig in den Mundarten. Ein Anknüpfen an vergangenes Sprachgut ist zwar nicht allgemein,

aber in vielen Sonderfällen möglich, auch in der Grammatik. Wie verhältnismäßig kräftig leben die doch schon häufig totgesagten Formen des Konjunktivs und des Genitivs! Unsere Geschichtlichkeit wird nicht bereits dadurch überwunden, daß die Geschichte viel Kulturgut absterben läßt, sie wird vielmehr eben hierdurch verstärkt, denn das nicht Abgestorbene, aber geschichtlich Begründete kann sich deshalb um so kräftiger entfalten."
(S. 196, 197)

次で，同じ頁の下段の註では，例にあげた Oheim という語について，次のようにその見解を述べている．

„Das besondere Wort für den Bruder der Mutter hängt mit mutterrechtlichen Zuständen zusammen. Da diese nicht mehr bestehen, hätte nichts dagegen gesprochen, das Wort Oheim neu zu orten, nämlich auf den Bruder beider Elternteile. Hier denkt Weisgerber synchronischer als von Polenz."

更に，de Saussure の要求を絶体化することは不可能である理由を述べて，これを克服した．Trier や von Wartburg に言及した Hans Arens (Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart. 2. Auflage 1965) は次のようにその所信を明らかにしている．

„Die Sicht auf die Sprache als auf eine gegliederte Ganzheit wird ... nicht von der Betrachtung des Sprachwerdens, sondern von der Betrachtung des Sprachseins her neu gewonnnen. Der Genfer Saussure ist es, der von seiner Linguistique synchronique her den Rückweg zum humboldtischen Gedanken der Gliederung (articulation) öffnet……Aber wie ist das Werden in dieses wesentlich ruhende Gliederungsbild einzuordnen?……Wenn es nicht

gelingt, das Sprachwerden hier einzuordnen, dann kann die Sache nicht stimmen. Denn das Werden kann aus der Sprache nicht weggedacht werden; das hieße den Begriff Sprache verfälschen. Saussure selbst hat es — wie bekannt — mit einer Gewaltlösung versucht. Nach ihm sind Sprachwerden und Sprachsein zwei vollkommen getrennten Wissenschaften zuzuweisen, der linguistique diachronique und der linguistique synchronique……Eine verblüffende und—wie die Folge gezeigt hat—anregende und förderliche Formel, aber eine sprachwissenschaftliche Ungeheuerlichkeit, da sie eine Einheit des Gegenstandes Sprache aufhebt…… Die Überwindung der Saussureschen …… Spaltung wird auf zwei Kampfgebieten versucht…….“ (S. 520—521)

（なお，共時論，通時論の問題については，戦後のドイツで盛んに論議されたが，これについては，Weisgerber の近著 Zweimal Sprache 1973 S. 52〜54 をも参照）

さて，一般に Fremdwort を Lehnwort と解しようとする von Polenz は純共時的な概念に，Fremdwort という表現を用いたのであれば，外国語の表現を時々引用のように使用する場合に限るべきだと主張し，例えば，アメリカへ旅行した人が „formalities“ という語を引用すれば，これが Fremdwort であり，ドイツ語の用法では引用的な性格を有するにすぎないと述べている．尤もこの引用価値云々ということはすべての外国語について言えるものであり，又外国語と外来語の限界が判然としない場合も多いが，できる場合には，既に Elise Richter (Fremdwortkunde 1919. S. 8) が言うように，やはり外国語と外来語はできる場合には，区別すべきものであると考えられる．このように，外国語や外来語を甘受しすぎるか，自国に適当な表現があるにも拘らず，適確に該当しない外国語を次々に，あくことなく濫用する結果，本来の外来語と外国語の区別がなくなる

のは洋の東西を論ぜず，誠に遺憾なことと言わなければならない．（これについては，Th. Steche, Neue Wege zum besseren Deutsch. 1925. S. 7ff. 等が提案する Gastwörter という用語と，Mackensen もこれを時々用いていることをも参照）

そこで，von Polenz は，Lehnwort という表現を „Lehnwörter im synchronischen Sinne sind dagegen alle Wörter fremdsprachlicher Herkunft, die mindestens in einer größeren Gruppe von Sprachteilhabern zum üblichen Wortschatz gehören. Sie lassen sich synchronisch in verschiedene sprachsoziologische Kategorien des heutigen deutschen Wortschatzes einordnen.“ と解し，大学教育を受けたものが使用し，これらの人々のみが正しく理解する語が第一の範疇に属するとみて，一定の職業や専門分野の術語に属する語を第二の範疇に入れ，公共の生活の極めて重要な事柄を十分によく知っている人々には積極的な語彙であり，従って，共通の語彙に数えられるものを第三の範疇とみている．なお，最近の米語からの転来語の多くは，現在既に一般の共通語となっている．(Z. B. Manager, Hobby, Party, fair, Playboy, Sex usw.)（米英語からの影響については，Br. Carstensen, Englische Einflüsse auf die deutsche Sprache nach 1945 ; Br. Carstensen - H. Galinsky, Amerikanismen der deutschen Gegenwartssprache. Entlehnungsvorgänge und ihre stilistischen Aspekte 1963）（なお，Lehnwort を volkstümlich (Z. B. Universität) と unvolkstümlich (Z.B. Subvention) の 2 種に分類した Elise Richter (Fremdwortkunde 1919. S. 8) をも参照）

このような Lehnwort の範疇の区別は，von Polenz も認めるように，包括的な統計による調査をまってはじめて可能となるものであるが，多くの場合に言えるのは，この問題は，先ず，集団的言語の一現象であると言うことである．現代は統一された言語の時代であるとも言われるが，それ

でもまだその語彙に言語社会学的にみた文体上の差異があることが認められていないようである．

言うまでもなく，抽象的な概念の細分化という課題は久しい以前から，一般の語彙では解決できないので，科学者や専門家はいずれもそれぞれの術語に苦心して外国語の助けを求めてきた．併し，現代の報道機関により，これまでいろいろな社会層の語彙や文体様式に通じなかった人々も，多くの異った専門分野の語の用法と日々接触することになり，又一般の共通語，教養語，専門語の関係は問題になったように思われる．従って，恐らく，今日多数の人々は，多方面の語の魅力に刺激されて，aktiv な語彙よりも，中途半端な passiv な語彙が絶対に有勢であると考えられるので，この点に，現代の語彙発達の危険が認められる．(Mackensen, Traktat 特に，S. 89—98 をも参照)．

次に多くの専門語や教養語も，ドイツ本来の言語資料から造られるとの意見もあるが，この原則によると，新しいものはすべて，古いものから，派生することになるので，これがために，益々冗長な派生語や多くの節に分かれた合成語が発生するのは必然で，その結果，古い語幹には，比喩的な用法によって，常に新しい内容の負担をかけることになる．現代の文化語には，その語彙の発達に際して伝統的な基本的語幹ではことが足りないことは今更言うまでもない．

外国の語や語幹は，ドイツ語内で語源的に孤立しているので，純ドイツのものほど，内容上有用でないと，これまでよく言われてきた．言語構造の共時的考察にとって，ここで問題になるのはその語に，根拠又は派生能力があるかないかということである．確かに，転用という史的変遷の事実は，一時代の言語構造の考察にも，内容上の語の構造に作用を及ぼしている．多数の転来語は根拠がないままになっている．即ち，これらはドイツ語では造語上，なんの関係もなく，又派生できないものである．(Z.B. Balkon, Hobby usw.) 併し，転来語やその語幹が，造語法からみて，生

産的になると，それらの派生語にはドイツの語彙の中でも，根拠ができることとなるが，この場合には，言語社会学的な差異が著しく影響するものである．(例えば，種々の社会層からみた Auto からの派生語，Automobil, Autogramm, Automat, Autobiographie, Autograph, Autodidakt, Autokratie, Autonomie usw. を参照)

上述のことは，共通語で集団を形成した転来語幹について言えるので，ここで，von Polenz はラテン語から転来した前綴 re- を例にあげて，根拠の有無という点から，これを細別して観察している．これらを単に外国語からの派生語とみる史的考察では，現代ドイツ語の多くの転来語形の構造的集成を認めることができないだろう．このことは後綴についても同様である．

例えば，Hans Marchand (The Categorie and Types of Present-day English Word-formation 1960) は造語論の方法論に関する論文 Synchronic Analysis and Word-formation. (In: Cahiers de Ferdinand de Saussure 13, 1955. S. 7ff.) で，従来の史的造語論では，外国語の要素からなる語の取扱いを重視しなかった事実を指摘しているとのことである．西独の例をあげれば，W. Henzen (Deutsche Wortbildung. 3. Auflage 1965, S. 168) は -ant, -aster, -ian, -ikus, ist に終る少数の人を表す語をあげているが，現代ドイツの語彙で，これらが，どんな異った造語構造をもっているかを区別していないようである．-ant を例にとって言えば，派生能力のない Gigant, Pedant, Leutnant 等に対して，根拠のある -ant の語形も認められる．(Z. B. Gratulant, gratulieren, Graturation; Demonstrant, demonstrieren, Demonstration; Musikant, musizieren, Musik usw.)

これは既に Hermann Paul がその Prinzipien で指示したもので，この場合には古いドイツの後綴のように，造語上の比例がみられるが，これも，生産的な造語の原型として研究されている．これら，-ant に終る派

生語は，„X+ieren−X+ant“ という造語の原型によって造られ，„Täter der Handlung X“ という同じ意味構造をもつものである．この造語の原型によって，次々と必要に応じて，新語ができるのであるから，転来語幹，その前綴，後綴を含んで，この原型を研究することは，現代語に関するドイツ造語論の未解決であり，しかも重要な課題と言われるのも当然のことだろう．

又 von Polenzも言うように，現代ドイツの語彙構造で，派生能力の有無という点からみて，転来語やその語形を区別することは，意味能力の有無によって，語を分けることにはならない．何千という古いドイツの語には，根拠や動機がないが，これがために，それらの語の内容上の機能やドイツの語の構造内での地位はかわるものではない．根拠や動機のあるものでもそれが誤りで，いたずらに人を迷わすものもある．(Z.B. Puzelbaum, Fahrstuhl usw.) 併し，このような疑似的な根拠によって，これらの語の内容上の価値は減じるものでもない．同じように，古いドイツの語から派生した現代語の方が，根拠のない転来語よりも意味が分り易いとは必ずしも言えないのである．(Z.B. Bürgersteig-Trottoir, Kraftwagen-Auto 等参照)

de Saussure によれば，語の派生能力というものは，単に言語記号の相対的な根拠にすぎないもので，この根拠は語彙の一部分にのみ存在するのが常である．従って，これは記号的性格の必須の条件とは言えない．これは任意性を制限するもので，言語記号の本質に属している．我々は大部分の語の内容を言語記号で，語形と結びついた概念によって知るのである．決して派生能力によるものではない．しかも，言語の交通によって知った概念は，各語と語の分野内での隣接語やその他の文脈に現われる語との構造的関係によって確保されるものである．(なお，de Saussure の „relativement motivé“ については，特に，H. Glinz, Linguistische Grnndbegriffe 1970. S. 58—72 参照)

語とその文脈との関係，これこそ言語の用法で転来語が演じている役割を考察しなければならない決定的な観点であり，この観点で今日でも外来語批判が可能であり，必要でもある．専門語や学術用語が，それらの内容を慣用的な意味に規定するような文脈，情況又は前後関係で用いられているかどうか，又これらの語が言語社会学的な前提によって，これらの規定された内容をよく理解できるような人に対して用いられているかどうかということが重要な問題である．（この点，Leibniz, Unvorgreifliche Gedanken betreffend die Ausübung und Verbesserung der deutschen Sprache. 1697. §87, §90, §94 や Mackensen, Traktat über Fremdwörter S. 53 も，大体 von Polenz と同じような見解を述べている．）もし，一集団に制約された語彙の領域から，内容が不明瞭な語を軽率，又は悪意から濫用するか，又は単に語の響きで，他の目を引くか，人を欺くか，迷わす目的でだれかがこのような語を用いることがあれば，そこで，言語の評論やその育成の方面にとって重大な問題が生じるのは当然である．現代の我々が必要とするものは，専門語や教養語に対する全く無意味な文化悲観論的な闘争よりも，言語社会学的な見地からの文体論である，と転来語の意義を重視する von Polenz は強調している．

さて，Lutz Mackensen は，20世紀ドイツ語史の名著と言われる Die deutsche Sprache in unserer Zeit (1. Auflage 1956, 2. Auflage Neuausgabe 1971) で，自らは国語浄化論者のように，外来語を拒否しないことを言明しているが，その近著 Traktat über Fremdwörter (1972) では，外来語，転来語，語源の問題から説き起し，外来語の源流としての専門語，外来語の機能の変遷，18世紀以降の科学，新聞，技術，政治方面からみた外来語の問題，特に19世紀から現代へかけての外来語を利用する人の急激な増加，一般的な技術化の傾向等について，言わば，外来語の例によって，近世ドイツ語史の散策を試みようとしている．特に，転来語の意義を重視する von Polenz に対して，Mackensen は，Weisgerber の

ように，外国語から転用される語をすべて外来語とみなしているが，現代ドイツの外来語観は恐らくこれらの三者によって代表されているといっても過言ではないだろう．特に，Mackensen は，Weisgerber よりも，積極的に，外来語の機能から，その価値を認めようとして，先ず，外来語への誘惑は，その内容が判然としない点にあるとみて，次のように述べている．

„Die Lockung zum Fremdwort liegt oft darin, daß es seinen Inhalt nicht einfach preisgibt, daß es sich dem durchschnittlichen Benutzer nicht schon durch sein Lautbild definiert, daß man seinen Stellenwert oft ohne große Mühe variieren kann und daß in anderen Fällen, sich ihm ein Stellenwert festsetzt, der seinen Ursprung verdeckt.“ (S. 20)

この一例として，Pornographie を参照されたい．又従来の自国の表現よりも，外来語の方が重々しく，威厳のあるものと考えられ，特に政界では好んで用いられる場合もある．この一例として，Verhältnis に代る Proporz があげられる．Mackensen によれば，外来語の問題で重要なのは，なぜその語がドイツ語に到来したのか，どうして，なんのために，それが用いられているかということになる．一般に外来語には，話の内容を膨張させる力や，自ら言いたいことを偽装する可能性があり，又省略したことを仮装させる見込もあるので，Mackensen は次のように，先ず，外来語の膨張価値，偽装価値，省略価値を認めようとしている．

„Treffen unsere Beobachtungen zu, so hat das Fremdwort für seinen Benutzer einen Schwellwert, einen Tarnwert und einen Sparwert bereits. All diese Werte haben in jeder Fachsprache verschiedene Bezüge.“ (S. 36)

これらの機能価値は，特に著しく目立つものであるが，これらに次ぐものとして，展開価値 (Fächerwert) と呼ばれる第四の価値がある．これは

そのあらゆる変形の中で，一基本形を表示するのに役立つからである．例えば，Pfannkuchen, Eierkuchen, Omelett; Poree, Lauch; Pomme frites, Chips 等を参照されたい．これらの場合の外来語は，類義語ではなく，いろいろな変形を示し，語形を拡大するものである．

次に，或種の外来語は，専門語以外の範囲で，言わば，結合価値（Verbundwert）を有しているが，これは我々がその内部で認めた第五の価値である．この外に，また広く専門語というよりも，むしろ，学者社会に共通の特殊階級語，「組合語」（Zunftwort）とでも呼ぶべき外来語もある．これは，所謂，象牙の塔を棲み家，又は避難所とする人々が常に用いる外来語である．（Z. B. Broschüre, Thema, Motiv, These, Konzept, Referat, Kategorie usw.）これらの語は，その一定の範囲内に限定され，外部には区切られているので，閉鎖の機能や価値を有している．この閉鎖的作用は，この150年間に，広範囲に及んだものと言われる．この閉鎖（Sperre）という用語は，社会言語学（Soziolinguistik）でよく言われる言語の壁（Sprachbarriere）よりも，適切な表現であると考えられる．Mackensen (S. 53) も，H. Bausinger (Deutsch für Deutsche 1972. S. 89ff.) も言うように，これは遮断する方からも，される方からも，双方から，この問題をみることができるからである．なお，H. Bausinger は，この閉鎖的機能を外来語問題の本来のものとみている．いずれにしても，一般に外来語というものは，それを使用する内部の人々に対しては，結合価値を有し，外部に対しては，閉鎖的機能を果すものと言えるだろう．従って，Mackensen も，Weisgerber や von Polenz と大体同じような見解を次のように述べている．

„Solange man“ „unter sich“ blieb, als „Akademiker“ zu „Akademikern“ sprach, blieb es dabei; bedenklich wurde es erst, wenn einzelne dieser Redeblüten un- oder auch mißverstanden in Sprechsituationen eindrangen, die für sie ohne Voraussetzungen waren.

Dann wurde die Blenderfunktion der Fremdwörter, ihr Schwellwert unverkennbar." (S. 53)

この最後の言葉 Blenderfunktion der Fremdwörter という点からみれば，外来語はすべて，„Ein Blendling ohne Zeugungs**kraft**" とみた Purist の Turnvater Jahn が，„Welschen ist Fälschen!" と叫んだのも無理はないと考えられる．(なおこれについては，A. Langen, Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart. In: W. Stammler, Deutsche Philologie im Aufriß 1. 1952. Sp. 1337 を参照) 従って，これらの外来語は，閉鎖する方とされる方の両方面に対して，装飾又は膨張的要素として，(もっとも，これらの両要素の限界は判然としていないが) これを文体的に利用することができるだろう．外来語そのものばかりではなく，それを用いる人々の頻度が増加するので，話す人々が，個々の語に注意を怠るという危険が増大する．この事実と今一つの他の事実，即ち，外来語が普及するにつれて，その内容をよく理解する必要と能力が次第に減少していくというその他の事実によって，多くの外来語に偏差度の幅が生じ，この内で，いろいろな意味のニュアンスが可能となってくる．

次に，Ideologie の両極性は，往々語内容の可変性に極性を付与して，正反対のものにすることがある．例えば，味方には最高の賞讃と同時に敵にはまた極めて痛烈な非難にも用いられる Kommunismus (その他 Agitation, Agent 等) を参照されたい．これらの外来語は Enzensberger (Kursbuch, 13. 1968. S. 191) が，「よろめき語」„wackelige Wörter" と呼んでいるが，例えば，demokratisch 等のように，いつも対照させるのではなく，その内容の説明や定義を試みようともしないで，時には，これによって，単に刺激を与えようとするにすぎないものである．(Z. B. Faschist, radikal usw.) これらの表現は政界によくみられるとのことである．この外に，話を膨張させ引き伸ばすためにだけ用いられる外来語も

あるが，これらは言わば，流行価値（Modewert）を有するにすぎないと言われる．(Z.B. orientiert, Aktion, Konzeption usw.)

スポーツをはじめ，その他の方面の流行で，外国語や外来語がよく用いられるが，これら外来語の数が急に増加したことや，人口の増加と比例して，それ以上に，これらの新しい外来語を使用する人々の数も激増したことも事実である．これらの語は，新しい結合的機能を果しながら，しかも，従来の場合とは異って，その閉鎖的機能は後退していると言われる．どの時代や国でも，時世におくれていないことを，外国語や外来語の知識で，誇示しようとする人心に変りはないらしく，このことを Mackensen は次のように表現している．

„Die freilich, die ihr Selbstgefühl dadurch wachhalten, daß sie ihre Zeitnahe durch Fremdwörter dokumentieren, sind nicht ausgestorben.“ (S. 93)

なお，宣伝が外来語の社会的効果を狙っていることは，今更言うまでもないが，どこの国でも，この場合には，外来語の宣伝価値を云々することができるだろう．

周知のように．ドイツやその西方の隣接国では，最近，殆ど時を同じうして，外国語や外来語を過度に使用しないようにと，政府から，警告が発しられたようである．これらの警告が申し合せたように類似しているのをみると，言語の発達が，どの国でも，同じような方向を辿っていることがよく分る．又その原因が，民族的というよりも，超民族的な事実，即ち，平行した経済形態，同一の生活状態，共通の消費態度等に認められる．現在ドイツの外来語辞典によれば，約 20,000 乃至 40,000 の外来語が共通の語彙に数えられているが，その中の約半数が専門語とのことである．併しながら，少数の場合を除いて，原則的に，重大な内容上の障害は認められないと言われている．

このように，現代ドイツの外来語問題に関する評論の多くは，進んで外

来語の価値を認めようとするか，少くとも，これに対して是認的，肯定的な態度を示しているように思われる．尤も，正しい意味の外来語というものは，一国と他の国々との間に政治，経済，文化等のなんらかの点で交流がある限り，必然的に起る言語現象であって，これを全面的に拒否することは不当であり，又不可能でもある．従って，必要な場合には，国際的な見地から，本来の外来語は勿論，それぞれの専門分野で，共通的な外国語を使用することも認めるべきだろう．といっても，無意味に外来語を濫用するか（どこにでもみられる現象ではあるが），まだその上に次から次へと一国語の語彙をわざわざ外国語に訳し直し，それから疑似外来語を造り上げることは個人の趣味として是認されるものではない．もっとも両者を区利することは困難であるが，少くとも，できる場合には，，上述のように外来語と外国語とは区別すべきものである．凡そ，一国語がその機能を完全に果せなくなると，必然的に国語運動が起るのは言語史の示すところである．（Weisgerber, Die geschichtliche Kraft des deutschen Sprache. 3. Auflage, 1971 参照）従って，一国語のために努力した人々の功績を無視し，その活動を嘲笑するようなことは正当ではないと考えられる．例えば，17世紀の浄化運動で生れた Augenblick, Gesichtskreis, selbständig, Verfasser, Briefwechsel, Jahrhundert, Zeitwort, Vertrag の表現等，又前世紀末に，ドイツ国語協会の努力によってできた Verfügung (für Dekret), Steuerveranlagung (für Assiette), Fehlbetrag (für Defizît) 等の語が，現に完全なドイツ語として残っている事実を参照されたい．（なお，17世紀の国語運動については，拙論「バロックのドイツ語観とドイツ国語協会の結成について」昭和46年関西大学，文学論集第20巻第4号，同「ドイツ国語協会の本質とその活動について」昭和47年関西大学，文学論集21巻4号と，同「Philipp von Zesen を中心としてみた国語浄化運動とその語史的意義」昭和48年関西大学文学編集22巻4号を参照.）

国語浄化論を全面的に否定する Mackensen は，一方では，„Wir„ Prügelkinder einer Zeit nationalistischer Überhitzung, können mit dem Purismus nichts mehr anfangen. Aber er ist nicht tot.“ (S. 5) と述べて，現在でも Hamburg の „Verein für Sprachpflege“ では，その会員達に，argumentieren に対して，treffstücken, Semikolon の代りに，Tuppstrich を用いることをすすめている事実を報じ，更に，Puristen を，国粋主義者と審美論者の二種に分けて，これを次のように評している．

„Sie scheiden sich in Nationalisten und Ästheten, in solche, die Fremdwortbenutzer für würdelos, und in die anderen, die sie für ungepflegt,für schlechte Stilisten halten. Sie verdächtigen Moral oder Geschmack der Andersdenkenden, das sind keine philologischen Kriterien.“ (S. 6)

併しながら，他方では，この Mackensen でさえも，言語研究に携わる人々が，無意識に，これらの Puristen の影響を受けている事実や，これらの人々の功績を次のように認めている．

„Die Sprachforscher, die sich veranlaßt sahen, sich mit ihnen auseinanderzusetzen, merkten manchmal gar nicht, wie sehr ihre Blickrichtung, ja auch ihr Vokabular von den Puristen bestimmt wurde. Doch deute ich, um Mißverständnisse zu vermeiden, schon hier an, was im folgenden öfters bestätigt wird; daß der m.E. unsachgemäße Kampf um die „Reinheit“ der Sprache viele zweckdienliche Einzelheiten ergeben und auch manche Erkenntnis vorbereitet und mitgeklärt hat.“ (S. 6)

この „der m.E. unsachgemäße Kampf um die Reinheit der Sprache„ という表現にみられるように，Purismus に対して，正反対の立場にある Mackensen は，「否定的浄化論」(der negative Purismus) で

なく，「肯定的浄化論」(der affirmative Purismus) を提唱する Goethe が当時の Puristen を風刺した次の Zahme Xenie, 即ち，

„Wir haben jetzt hundert Tyrannen,
die schmieden, uns gar unbequem,
ein neues Kontinentalsystem:
Deutschland soll rein sich isolieren,
einen Pestkordon um die Grenze führen,
daß nicht einschleiche fort und fort
Kopt, Körper und Schwarz vom fremden Wort."

を引用し，この言葉が現在でも，意義を有していることを力説して，その論述を終えているが，この Goethe の思想，即ち，異国の言語財を斥けないで，それを呑み込み，同化するというこの思想は，特に，現代のドイツで，いよいよその真価を発揮しているようである．Weisgerber をはじめ，von Polenz, Mackensen の外に，他の一例をあげれば，「現代ドイツ語の動向」を論じた H. Moser (Wohin steuert das heutige Deutsch? Triebkräfte im Sprachgeschehen der Gegenwart. In: Sprache der Gegenwart 1. Satz und Wort im heutigen Deutsch. 1967) も，外来語の問題に対する自らの態度を次のように表明している．

„Unsere Einstellung ist dabei—ohne daß die Probleme verschleiert werden sollen—im wesentlichen die Goethes, der die Auffassung vertreten hat, das Fremde sei für die Sprache nicht dazu da, daß sie es abstoße, sondern daß sie es verschlinge. Entscheidend ist, ob ein fremdes Wort eine Lücke im System ausfüllt." (S. 19)

次に Weisgerber と同じように，国語協会の原則を是認する Ernst-Günther Geyl (das Fremdwort in der Markt- und Meinungsforschung. In: Muttersprache, 77 Jhg. Heft 2, 1962) は外来語が有用な場合を，次のように限定している．

„Das Fremdwort ist nützlich: 1. Wenn es etwas kennzeichnet, was uns fremd ist (oder sein sollte), 2. vorläufig auch dann, wenn wir erst erwägen oder auf dem Sprunge sind, ein ausländisches Verfahren zu übernehmen. Ist die Probezeit beendet, dann sollte nach Möglichkeit allmählich ein deutsches Wort an die Stelle des fremden Wortes treten." (S. 36)

外来語の問題に関する論議，特に，その是非論は，今後とも絶えないだろうが，繰り返して述べたように，現代ドイツの大勢は，これに対して，少くとも寛容的な態度を示す方向に傾いていると言えるだろう．尤も，だからと言って，幾百年に及んだこの方面の国語運動が，いよいよこれで根絶したとは決して言えないのである．これまで度々述べたように，外国語や外来語の濫用が極度に達すると，これに対して，同じように度をこえた反動，即ち，過激な浄化運動が起り，必らず，事態は一変するものである．勿論，個人の言語使用にはある程度の自由が認められるが，要するに，Weisgerber がその結論で述べたように，この問題は，国語に対する各人の正しい，即ち，責任ある態度から，自ら，解決の道が見出されるものと思われる．外来語の問題についての Goethe の卓見に，不朽の価値が認められているように，ドイツの国語協会の原則の正しい意義を認めた Weisgerber の言葉を，筆者は感銘に価するものと信じ，最後に，これをも引用して，この稿を終りたい．

„Die Sprachgesellschaft hat nie das Fremdwort in Bausch und Bogen verworfen. Sie hat sich an den bewährten Grundsatz gehalten: Vermeide das fremde Wort für alles, was ebenso gut in deutsche Wörter gefaßt werden kann,—ein Rat, der sich zu allen Zeiten hören lassen kann und der ebenso den Erfordernissen der Muttersprache wie dem wohlverstandenen Nutzen des Einzelnen entspricht. Auch heute wird man diesen Grundgedanken beibe-

halten." (Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege. In: Muttersprache. 70. Jhg, Heft 1, 1960, S. 1)

## 主要参考文献


Leo Weisgerber
Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege. (Muttersprache. 70. Jahrgang 1960)

Leo Weisgerber
Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache. 3. Auflage 1971

Leo Weisgerber
Die geistigs Seite der Sprache und ihre Erforschung 1971

Leo Weisgerber
Zweimal Sprache 1973

Peter von Polenz
Sprachpurismus und Nationalsozialismus. Die Fremdwortfrage gestern und heute. (Germanistik—eine deutsche Wissenschaft. 2. Auflage, 1967)

Peter von Polenz
Fremdwort und Lehnwort, sprachwissenschaftlich betrachtet. (Muttersprache. 77. Jhg. 1967)

Peter von Polenz
Sprachkritik und Sprachwissenschaft. Neue Rundschau 74. 1963

Lutz Mackensen
Traktat über Fremdwörter 1972

Lutz Mackensen
Deutsche Sprache in unserer Zeit. 1. Auflage 1956. 2. Neubearbeitete Auflage 1971

Ernst-Günther Geyl
Sprache zwischen Sinnerstarrung und Sinnentleerung (Muttersprache. 77. Jhg. 1967)

Ernst-Gunther-Geyl
Das Fremdwort in der Markt- und Meinungsforschung(Muttersprache. 72 Jhg. 1962)

Muttersprache. (1926—44)
O. Steuermagel, Einwirkung des Deutschen Sprachvereins auf die deutsche Sprache(Wissenschaftliche Beihefte zur Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins. 6. Reihe. 1926)

Elise Richter
Fremdwortkunde aus Natur und Geisteswelt 570 1919
Friedrich Seiler
Die Entwicklung der deutschen Kultur im Spiegel seines Lehnwortes 8Bde 1910—24
Heinrich J. Rechtsmann
Das Fremdwort und der deutsche Geist. Zur Kritik des völkischen Purismus 1953
Adolf Bach
Geschichte der deutschen Sprache. 7. Auflage 1961, 8. Auflage 1965
Hans Sperber-Peter von Polenz
Geschichte der deutschen Sprache. 5. Auflage 1966, 7. Auflage 1970
Hugo Moser
Annalen der deutschen Sprache. 5. Auflage 1973
Hugo Moser
Deutsche Sprachgeschichte. 6. Auflage 1969
Hugo Moser
Wohin steuert das heutige Deutsch? Triebkräfte im Sprachgeschehen der Gegenwart (Sprache der Gegenwart 1. Satz und Wort im heutigen Deutsch. 1967)
Hans Eggers
Deutsche Sprachgeschichte. 3 Bde. 1963, 1965, 1969
Hans Egges
Deutsche Sprache der Gegenwart im Wandel der Gesellseheft, In : Sprache ; Gegenwart und Geschichte 1969
Hans Eggers
Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert 1973
Geschichte der deutsdhan Sprache, verfaßt von einem Autorenkollektiov unter Leitung von Wilhelm Schmidt 1969
Fr. Tschirch
Wachstum und Verfall der Sprache. (In: Muttersprache 75. 1965 S. 164ff.)
Fr. Tschirch
Geschichte der deutschen Sprache. 2 Bde, 1966—69
Eduard Engel
Sprich Deutsch! Ein Buch zur Entwelschung. 2. Aufl. 1917
Eduard Engel
Entwelschung. Verdeutschungsbuch, 1918
Eduard Engel

Deutsche Sprachschöpfer. Ein Buch deutschen Trostes 1919
H. L. Koppelmann
Nation, Sprache und Nationalismus 1956
Hermann Villiger
Bedrohte Muttersprache 1966
Von Wartburg
Das Ineinandergreifen von deskriptiver und historischer Sprachwissenschaft. (In: Berichte über die Verhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Phil. -hist. Klasse 1931)
Von Wartburg
Einführung in die Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft 1943
W. Henzen
Deutsche Wortbildung. 3. Auflage 1965
H. Bausinger
Deutsch für Deutsche 1972
A. Langen
Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart (W. Stammler, Deutsche Philologie im Aufriß 1. Auflage 1952, 2. Auflage 1957)
G.W. Leibniz
Unvorgreifliche Gedanken betreffend die Ausübung und Verbesserung der deutschen Sprache 1697
H. Glinz
Geschichte und Kritik der Lehre von den Satzgliedern in der deutschen Grammatik. Wirkendes Wort, 1947
H. Glinz
Linguistische Grundbegriffe 1970
D. Sternberger
Gute Sprache und böse Sprache, (In: Neue Rundschau 72, 1963)
U. Klemperer
Lingua Tertii Imperii(ii) 1947
Trübners Deutsches Wörterbuch, herausgegeben von Alfred Götze. 8 Bde. 1939—57
H. Arens
Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart. 2. Auflage 1965
G. Helbig
Geschichte der neueren Sprachwissenschaft. Unter dem besonderen Aspekt der Grammatik-Theorie 1970

# Wandel der Anschauungen über das Fremdwortproblem im Spiegel der deutschen Sprachgeschichte im 20. Jahrhundert

**Kinosuke Fukumoto**

Leo Weisgerber, der erste Sprachforscher, der nach der Neugründung der Gesellschaft für deutsche Sprache zum Fremdwortproblem grundsätzlich Stellung nahm, sagt in seiner Schrift (Das Fremdwort im Gesamtrahmen der Sprachpflege 1960) folgenderweise. „Die heutige Zeit scheint dem Fremdwort verhältnismäßig gleichgültig gegenüberzustehen.“ Nach ihm kommt diese Sachlage von der Erkenntnis her, daß der geistige Austausch zwischen den Sprachen notwendig ist, und in der Übernahme des fremden Sprachgutes die Möglichkeit echter Bereicherung liegt. Auch Peter von Polenz geht mit seiner methodologischen Folgerungen auf die Gründe dafür ein, warum man in Deutschland seit 1937, dem Untergang des Sprachpurismus, in der Fremdwortfrage so zurückhaltend geworden ist.

Dieser Aufsatz, der den Wandel der Anschaungen über die Fremdwortfrage behandelt, will erst im Anschluß an P.v. Polenz und damalige Zeitschriften der Geschichte des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins bis zum Ende der Sprachreinigungsbewegung durch Verbot von Seiten der politischen Macht nachgehen. Dann

kommen verschiedene Stellungnahmen von L. Weisgerber, P. v. Polenz und L. Mackensen zu diesem Problem in Betracht. Aus der Auseinandersetzung mit diesen Meinungsäußerungen gelangen wir schließlich zu der beherzigenswerten Bemerkung Weisgerbers, daß „aus der sachgerechten Grundhaltung zur Muttersprache fast von selbst auch die richtige Mitte gewonnen wird, von der aus ebenso die Schäden des Fremdwortes vermieden wie die vielfältigen Aufgaben seiner Auswertung aufgenommen werden können, wie es die Erfahrung bestätigt hat."